

【資 料】

令和元年度食肉・食鳥肉病理組織検査担当者
育成研修会における症例報告(2)

鈴木 竹彦 鎌口 綾華

北海道帯広食肉衛生検査所（〒080-2465 帯広市西25条北2丁目1番地）

前号に引き続き、本研修会で検討された症例の中から4症例（90～94、91は欠番）の概要について報告する。

標本番号：90

提出標本：豚の腎臓

提出者：鎌口綾華 帯広食肉衛生検査所

動物：豚、ランドレース交雑種、雌、6カ月齢
生体検査所見：著変は認められなかった。

解体検査所見：両腎ともに大きさは概ね常だが、被膜との癒着著しく剥離難であった。皮質表面はほぼ全域で灰白色網状を呈し、粗造で硬度を増していた。断面は大部分が灰白色線維組織に置換され、皮質・髄質の境界は不明瞭であった（写真1）。その他、肝臓に包膜炎を認めたが、膀胱や枝肉等には異常を認めなかった。

病理組織所見：間質全域で線維細胞および好酸球の著しい浸潤を認めた（写真2）。尿細管は著しく減少・拡張し、管腔内には尿円柱を認めた。糸球体は著しく減少・萎縮し、基底膜の肥厚を認めた。また、PAS染色では糸球体全域が赤紫色に染色され、著しい線維化を認めた。糸球体毛細血管の二重化、スパイクの形成、メサンギウ

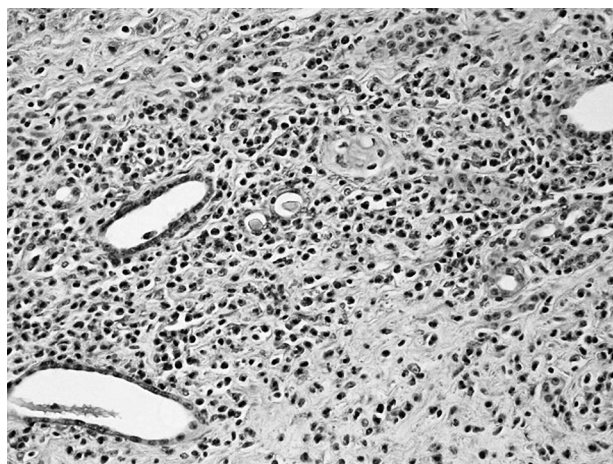


写真2. 豚の腎臓
間質全域で線維細胞および好酸球の著しい浸潤を認める（HE染色）

ム細胞の増殖等、糸球体腎炎を疑う所見を認めず、HE染色、PAS染色およびグラム染色において病原微生物は確認されなかった。また、間質の線維細胞の浸潤が著しい領域では、偏光レンズ下で高度なシュウ酸カルシウム結晶の沈着を認めたが、線維化病変との関連性は不明であった。

病理組織診断名：高度な線維化と好酸球の浸潤を伴う間質性腎炎

標本番号：92

提出標本：豚のリンパ節

提出者：吉成 香 岩見沢食肉衛生検査所

動物：豚、LWD、雌、1歳齢未満

生体検査所見：著変は認められなかった。

解体検査所見：右内腸骨リンパ節がブドウ房状に腫脹し、大きさは9×4×2～3.5 cmであった。断面は膨隆し、暗赤色部分と白色部分が入り交じって認められた（写真3）。右膝関節は軽度に腫脹し、暗赤色を呈する関節液の増量を認めた。また、関節面に絨毛の増生を認めた。他臓器に肉眼的異常は認められなかった。

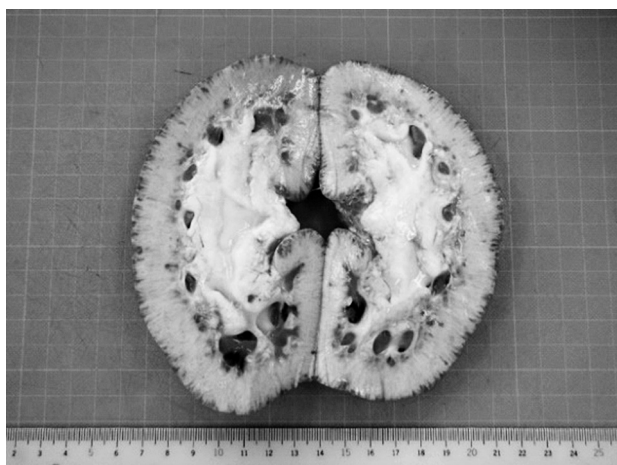


写真1. 豚の腎臓

断面は大部分が灰白色線維組織に置換され、皮質・髄質の境界は不明瞭（HE染色）

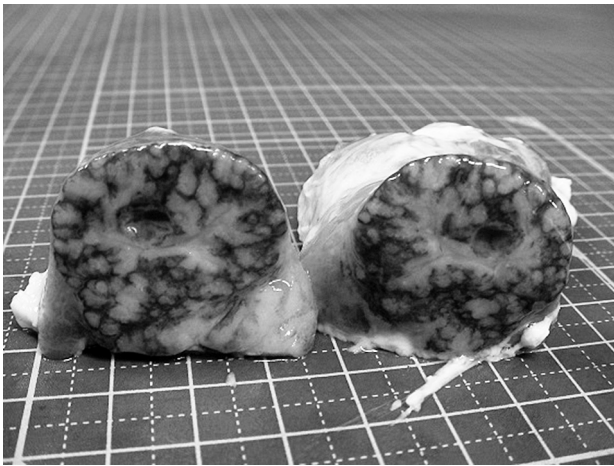


写真3. 豚の内腸骨リンパ節
断面は暗赤色部分と白色部分の混在がみられる

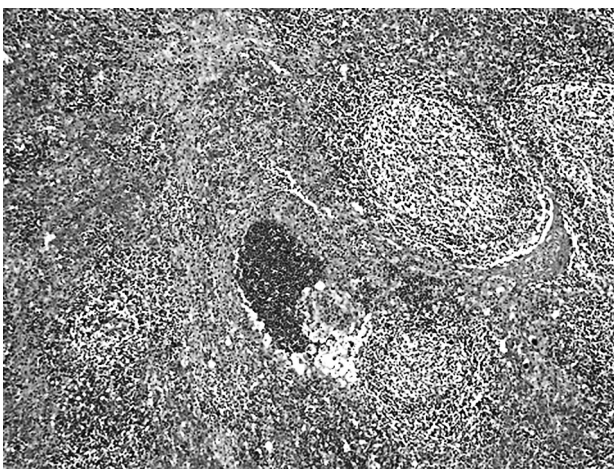


写真4. 豚の内腸骨リンパ節
リンパ洞は組織球、好中球および赤血球によって拡張し、一部で膿瘍を認める (HE染色)

病理組織所見：リンパ洞は拡張し、洞内に多数の組織球（洞組織球症）および好中球の浸潤を認めた。また、洞内に血液吸収および出血による赤血球が認められた。好中球および壊死退廃物で構成される膿瘍を一部で認めた（写真4）。皮質でリンパ濾胞の増生を認めた。

細菌検査結果：右内腸骨リンパ節および右膝関節液から、豚丹毒菌 *Erysipelothrix rhusiopathiae* が分離された。

病理組織診断名：化膿性リンパ節炎

標本番号：93

提出標本：牛の肝臓

提出者：河合雄介 旭川市食肉衛生検査所

動物：牛、ホルスタイン種、雌、156カ月齢

生体検査所見：消瘦が認められ、起立不能であった。

解体検査所見：肝臓の全面に1～6 cmの大小様々な乳白色の腫瘍が多発していた（写真5）。表面は隆起し

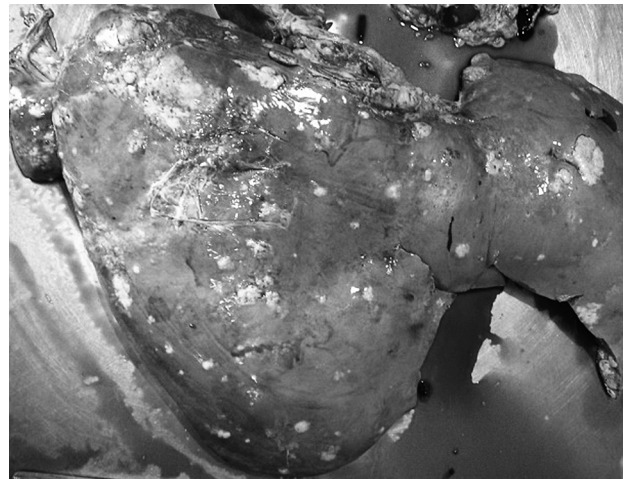


写真5. 牛の肝臓
全面に大小様々な乳白色の腫瘍が多発している

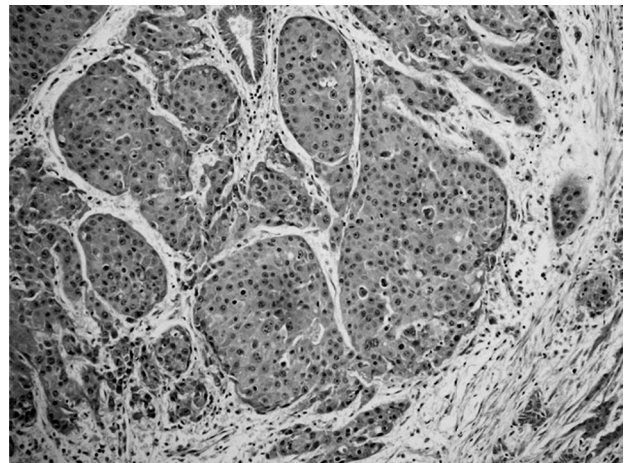


写真6. 牛の肝臓
大小不規則な胞巣を形成する腫瘍細胞と周囲の線維性結合組織 (HE染色)

粗造、断面は大小不同の充実性に富む分葉状の腫瘍塊の形成を認めた。同様腫瘍は深層にも多発し、実質との境界は不明瞭だった。胆管も著しく肥厚し、管腔に沿って腫瘍が浸潤していた。肝門リンパ節は5～6 cm大に腫大硬化し、断面は乳白色で分葉状に大小様々な腫瘍を認めた。気管気管支リンパ節、縦隔リンパ節、横隔膜リンパ節、胃リンパ節は顕著に腫大硬化し、断面は乳白色で分葉状に大小様々な腫瘍を認めた。皮下脂肪組織は著しく菲薄で蒼白傾向。左半身の筋間脂肪組織には広範囲に水腫を認め、左股関節周囲では筋出血を伴っていた。

病理組織所見：大小不規則な胞巣を形成する腫瘍細胞は、線維性結合組織を伴いながら周囲組織へ高度浸潤性に増生していた（写真6）。腫瘍細胞は好酸性で広い細胞質を有し、細胞境界は明瞭。核は大小不同の類円形で、中小不同の複数明瞭な核小体、豊富なクロマチンを認めた。一部の胞巣では面胞状の中心部が壊死したコメド様

病変を認めた。核分裂像も散見し、拡張したリンパ管内では、癌塞栓の形成を散見した。各リンパ節はどれも辺縁洞に沿って肝臓周囲と同様の腫瘍細胞が充実に増殖し、一部小節周囲皮質洞に浸潤していた。PAS・アルシアンブルー染色では、腫瘍細胞に細胞内顆粒および粘液産生は確認されなかった。また、腫瘍細胞はサイトケラチン AE1／AE3 および サイトケラチン 7 陽性、サイトケラチン 20 は一部陽性であった。

病理組織診断名：角化を伴わない扁平上皮癌の肝転移

標本番号：94

提出標本：牛の肺と肝臓

提出者：木村香澄 北見保健所食肉検査課

動物：牛、ホルスタイン種、雌、82カ月齢

生体検査所見：消瘦、元気消失が認められた。

解体検査所見：肝臓左葉～方形葉に、直径0.1～3 cm を主とし、最大5 cm 大の硬い黄白色不整形腫瘍が密発していた。腫瘍は辺縁部や脈管周囲に偏在する傾向がみられた。表面付近の腫瘍は軽度に隆起し、最大腫瘍の中心部は陥凹していた。断面は黄白色充実性で、境界は比較的明瞭であった。肝内胆管は肥厚し、肝静脈に乳頭状腫瘍を認めた。肺全体に小葉1個～数個に及ぶ透徹感のある黄赤色病変を多数認めた。割すると、腫瘍性塞栓および直径0.1～0.5 cm 大の境界やや不明瞭な黄白色腫瘍が多数みられた。小葉間に浮腫を認めた。脾臓包膜に直径0.3および0.5 cm、厚さ0.2 cm の黄白色腫瘤を各1個認めた。腎臓表面に直径0.1～1 cm 大の灰白色腫瘍が多数発した。肝リンパ節、前気管気管支リンパ節、空腸リンパ節は腫大、硬化し、断面は黄色～黄白色で結合組織により区画され不規則な分葉状であった。腎リンパ節では、表面に隆起する黄白色結節状腫瘍を2個認めた。



写真7. 牛の肝臓

シート状～胞巣状に増殖する腫瘍細胞。管腔構造も散見される (HE 染色)

病理組織所見：肝臓の腫瘍組織は、豊富な結合組織により健常部と区別され、腫瘍細胞がシート状～胞巣状に増殖し、好酸性物質を容れる管腔構造も散見された (写真7)。腫瘍細胞の肝組織への浸潤も一部でみられた。腫瘍細胞は類円形の淡明な核と弱好塩基性の細胞質をもち、細胞境界は不明瞭で、有糸分裂像も多数みられた。肺も肝臓と同様、腫瘍細胞が結合組織を伴い増殖し、管腔構造もみられた。小葉間、気管支、細気管支および肺動脈周囲にも腫瘍細胞の浸潤を認めた。腫瘍組織周囲の肺胞内に液体の貯留を認めた。脾臓包膜、腎臓、肝リンパ節、前気管気管支リンパ節、空腸リンパ節および腎リンパ節でも、肝臓と同様の腫瘍細胞を認めた。腫瘍細胞と管腔内物質はPAS陽性、腫瘍細胞はサイトケラチン AE1／AE3、サイトケラチン 7 陽性、ビメンチン陰性であった。

病理組織診断名：胆管細胞癌